

# 横浜日本中国友好協会 <協会通信>

2023.01.04 (2022年度版 No4)

編集：小松崎

## 年頭所感 2023

会長 飯田 助知



水墨うさぎ  
<川浦みさき画伯提供>

新年を迎え、今年は例年とは様相が少し違うと感じている方が多いのではないのでしょうか。私も、すぐ、“めでたさも中ぐらいなりおらが春”（一茶）、の一句が頭に浮かびました。コロナの終息が見通せず、併せてロシア・ウクライナ戦争が不安を世界に拡散させているからでしょう。しかし、私たちは決して理想を失ってはならないと思います。迷ったら基本に帰れ、とは山登りに限らず、すべてに通じるように思います。

昨年日中国交正常化50周年で、私たちには、そこに至る経過即ち歴史と先人の努力の跡を丁寧に学び、今後の友好平和への方向性を描くことが求められました。いま翻ってどんな印象をお持ちでしょうか。残念ながら、専門家といわれる人たちでも問題点の列挙にとどまる場面が多かったように思います。不透明な時代だから、という理由で頭を抱えるだけでは、事態は悪化する一方だと思います。世界が戦争に向かって歩み始めた、とさえ思う人も出始めています。

私は、カギを握るのは「民」だと思います。民主主義の「民」です。そういえば、いまアメリカでも民主主義の危機が叫ばれています。日本でも、国益という言葉で「民」をないがしろにする言説が見られますが、それは間違った使い方

だと思います。ことばの本となっている英語のネイションは、ネイティブから来ていることでもわかるように本来国民という意味であり、「国民益」というべきです。

昨年9月に開催された中日友好交流会議の共同文書は、「我々は、民間が先行し、民を以て官を促すというよき伝統を引き続き発揚すべきだと考える。」とその決意を述べています。

私たちも、民と民の連携、そして交流と協力こそが友好平和への道であると確信し、日々の活動に地道な努力を重ねたいと思います。



**「卯年」** は、成長・飛躍・豊穰・子孫繁栄の年と言われている。さて、どんな年になるか？

- ◆十二支では「卯（う）」、動物として「兔（うさぎ・ウサギ）」 ◆二兔を追うものは一兔をも得ず
- ◆兔の昼寝（ウサギと亀） ◆脱兔之勢（だつとの如く・最速72キロとか） ◆守株待兔（株を守りて兔を待つ・旧習にとらわれて進歩できない例え ♪待ちぼうけ 待ちぼうけ ある日せっせと野良かせぎ・・・）
- ◆亀毛兔角（きもうとかく） 亀に毛、兔に角（ありえないことの例え）「兔角」「兔にも角にも」「兔に角」は、当て字とのこと。◆夏目漱石「草枕」の書き出しにある「兔角」も当て字とのことです。～山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兔角（とかく）に人の世は住みにくい～

**横浜日本中国友好協会** (1973年創設)：日本と中国の友好を願う民間のボランティア

組織です。協会加入をお待ちしています。

中国語講座生、太極拳講座生、日本語ボランティア活動(学習支援・学習者)を募集しています。

詳しくは [横浜日本中国友好協会 HP](#)⇒





## ”纪念中日邦交正常化 50 周年—中日友好音乐会”

### 97 岁曹鹏“指挥”在沪中日民间音乐团体奏响友好乐章

2022年11月20日上海東方芸術センターコンサートホールで日中の民間の音楽団体と歌手が共演した日中国交正常化50周年記念コンサートが開かれた。中国の有名な指揮者、曹さん(97歳)がステージに登場し椅子に座り、タクトを振った。ベートーヴェンの交響曲第9番第4楽章は、「日中友好コンサート」を盛り上げた。

「東方網日本語版」報道・上海でのコンサートの模様を一部加筆、編集したものです。



上海東方芸術センター：浦東地区世紀大道にある舞台芸術・文化施設、2004年開業した。

<東方网日文版(曹俊) 2022-11-21 18:37>

### 「星の子供たち」や森さんなどが中日友好コンサートに集い

### 中日国交正常化 50 周年を音楽で記念

中日国交正常化50周年の記念に、上海市曹鹏公益基金会、上海曹鹏音楽センターが主催し、上海市人民对外友好協会、日本国駐上海総領事館、上海市欧米同窓会が後援する中日友好コンサートが20日東方芸術センターで開催された。天使知音サロンの「星の子供たち」、上海城市交響楽団、上海吹奏楽団、在上海日本交響楽団、中日合唱団など、中日両国の音楽愛好家約200人が出演した。

コンサートの始めに、上海市人民对外友好協会の陳靖会長と日本国駐上海総領事館の赤松秀一総領事がそれぞれ挨拶をした。陳会長は、「この半世紀、両国の関係は各有識者の共同努力で前に進んでいる。音楽は国境を越えて心の交流をする架け橋だ。

今日ここに音楽によって中日国交正常化50周年を記念することは非常に有意義だ。出演する中日双方の音楽団体と音楽愛好者、そしてコンサートの開催に尽力された97歳の高齢の曹鹏氏に特別な感謝の意を表したい。」と述べ、公益事業への奉獻と情熱、民間友好に愛を奉げる人々に感謝した。

赤松秀一上海総領事は、「2007年の中日国交正常化35周年の際には、上海市曹鹏公益基金会の曹鹏榮譽理事長と曹小夏榮譽副理事長が、日本側の音楽団体と縁を結んでコンサートを開催した。そして15年後の今、中日両国の音楽愛好者が集まり音楽を通じて中国と日本の両国が友好を示すのは貴重だ。」と述べました。



<陳靖上海市対友協会長>



<赤松秀一上海総領事>



<上海吹奏楽団と天使知音サロンの「星の子供たち」の演奏>



◆ コンサートは上海の日本人などで構成された上海吹奏楽団が演奏する世界で最も長い英語単語が曲名の『Supercalifragilisticexpialidocious (すごくいい)』で幕をあけた。続いて、舞台には数ヶ月前にウィチャットの视频号で「上海の風」をアップした森さんも登場。森さんは、「こんな大きな音楽ホールに出演したのは初めてで、中日友好のために微力ながらも貢献できればうれしい。」と語った。

※森爷爷：2008年から上海の日系企業で働きながら27名の仲間と音楽活動をしている。作詞作曲した“我爱你上海・上海の風”がコロナ感染下の市民を癒す曲として感動と励ましを与えた。



<ブラズバンドの演奏>



<森爷爷>

<上海の風>

いつもと違う青い空と喧噪さえ消えたストリート 仲間と会えずもう2か月 この街はまだ眠ったまま 初夏の日差しも通り雨も心の闇を消せはしない この街で暮らす僕たちはそれぞれに理由はあるけれど 例えば僕ならこう話  
上海の風の匂いが好きだから



◆ この日、最も注目を集めたのは天使知音サロンから参加した「星の子供たち」だ。子供らは音楽に囲まれた環境の中で外部との交流のルートを築き、自分の心を開けることを学んだ。今回はこのコンサートのために一生懸命に練習して、中日両国でよく知られているブラズバンドの演奏や合唱を披露。さらにダンスも発表して会場の観客と一緒に踊って交流し、公演の雰囲気は大いに盛り上げた。



<星の子供たちが現場の観客と一緒にダンス> <97歳の指揮家曹鵬氏と中日の音楽愛好家による「歓喜の歌」合唱>

◆ 最後の一曲は97歳の指揮家曹鵬氏が指揮するベートーベンの「交響楽第9番第4楽章・歓喜の歌」で中日の音楽愛好者のすばらしい演出がコンサートを盛り上げた。曹鵬氏は記者の取材を受けて、「ベートーベンのこの曲を選んだのは、ベートーベンが数百前に世界の人々はみな兄弟のように愛しあうべきだと伝えたからだ。私は世界の平和に期待している。中日両国は一衣帯水の隣国で現在のようないい局面を維持することを希望する。」と述べた。

◆ 観客に感想を聞いたところ、このうちの藤田さんは、「『天使知音』の子供たちによる自然な演出はすばらしい音楽で心をオープンにして、われわれの心を感動させた。純潔で美しいと思う。97歳になる曹鵬先生が指揮をして社会に貢献していることは、音楽が国境を越えるものであり、中日人民の友

好交流の大切さを多くの人に実感させただろう。」と興奮気味に語った。また陳祖恩さんは、「コンサートの最後にベートーベンの『交響楽第9番第4楽章(歓喜の歌)』を選んだのは非常に有意義だ。中日友好のコンサートとして、同曲の演奏は両国の民衆は調和の取れた中日関係を期待しており、歓喜が永遠に平和の生活のテーマだということを示したと思う。」と語った。

◆上海市留日同学会呉霞琴副会長の感想> 97歳の曹鵬氏指揮に涙が出るほど感動しました。また、星の子供たちも音楽で楽しく過ごしている様子も、感激で胸いっぱいです。2019年11月にいつも交流している長崎からの訪問団を案内して見学に行ったことがありますが、その場面はなかなか忘れることができません。何人かの子供たちは、昨夜のコンサートにも出ていました。



## 母親の日本での生活感想と日中国交正常化50周年に思うこと

伊丹 夏樹

北京から留学生として来日しました。

東京オペラ協会に所属し日中合作オペラ「徐福」に出演、通訳などに参加するとともに日本の伝統文化を中国へ紹介する事業活動（下面写真参照）を行っています。現在横浜の金沢区に在住。

母親が日本での経験、生活や医療などについて聞いた話の一部を纏めて投稿しました。

投稿の機会を頂きまして有難うございます。

2022年12月 伊丹 夏樹



**<カルチャーショック>** 30年ほど前に初めて来日したときの母親の話をしします。

母親がはじめてスーパーへ買い物に行った時、店員が少なく、お客は勝手に必要な商品を自由に選び、レジで支払うというお客を全面的に信用したシステムに驚いたとのこと。また、ある日、母と二人でデパートの靴売り場で試着していると、店員は優しく母の足元に“土下座”していろいろと手助けをしてくれました。そして恐る恐る一人で外出したある時、バスターミナルで自分の乗るバス乗り場が分からなくなり、通りかかりの人に尋ねると、親切に乗場まで連れて行ってくれました。

母親は、このような接客サービスや日本の方々の親切さに当時の中国には無い文化の違いを強く感じたと話しています。私も、来日したばかりの頃この様な思いを沢山経験しました。

**<歯科医院で>** 母親は、中国で内科の主任医師でした。日本の医療機関で治療を受けた時に感じたことについて話をさせていただきたいと思います。

母親がまだ中国で暮らしていた時、中国での歯の治療で大きなショックを受け、それ以後、歯の治療は拒み続け

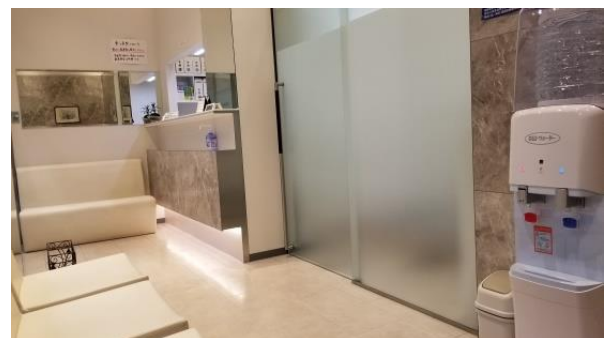
て来ましたが、どうしても我慢の限界を超えたので、日本の歯科医院で治療することを決心しました。不安感がいっぱいの中、歯科医院に行くと言診察室の室内には隅から隅まで清潔感に溢れ、完璧に環境が整えられており、先生は丁寧に説明してから治療に取り掛かりました。このように説明があった上での治療は、母親は何も心配することなく安心して先生に全てを委ねられ、心が癒されほっとする気持ちになりました。

次の治療日には、診療台に上がると何と驚いた事に中国語に訳された単語カードが用意されており、びっくりして胸を詰まらせました。先生の患者に対する心遣いがとても有難く、先生の優しさが身に沁み、我々外国人患者の気持ちを良く察してくれていました。

母は、医者として毎回教室へ入って、授業を受ける生徒になった思いだったと言っています。そして凛とした仕事振りの姿の先生は、医者の鏡だと申しております。

歯を抜く、抜かないで歯医者へ行くのが嫌になったのですが、ここでは全て抜かずに済みました。2ヶ月以上続く治療期間は長かったですが、医徳が高い先生のお陰で、精神的に心が癒され、安心して毎回も楽しく治療をしていただく事が出来ました。何と言っても抜くしかないと言われた数本の歯が、ここではすべて抜かずに守られたと云うこの喜びと驚き、こんなに嬉しい事はありません。

お陰様で口を大きく開け声を出して笑うことができ、グルメをじっくり味わうなど人生を存分楽しむこともできています。



**<内科医院で>** ある日母親が膝を痛め不眠、動悸が煩わしく、歩く力も衰えてきましたので、やむなく家から一番近くの心臓内科に受診することにしました。



先生と自分の症状のやり取りが出来なく、会話も出来ずもどかしく悩んでいました。母親は、中国で内科主任医師として勤務した経験を活かし、受診する前に自分の病状説明、薬の効果、用量等を書面にして娘の私の翻訳も付け、それを用意して受診を受けると云う事になりました。

先生は直ぐ母が同業者であることに気が付き、母の検査数値データやカルテなどを見せながら説明して下さるようになり、とても母はほっとして安心しました。その間、暫く治療と薬の服用続けておりましたが、顕著な効果見られない時期もあり、先生はある大学付属病院の紹介状を用意してくださいました。しかし、私は、規模は小さくても全ての医療機能が揃っているのでここで治療を続けることにしました。その後母の病状は少しずつですが、回復に向かい今ではすっかり良くなっております。

**<先生の対応に感動>** これまで通った病院の先生方は皆素晴らしい先生でした。お医者さんの診療を受けて健康に自信を持つようになりました。そのような先生方に巡り会えた母親はとても幸運でとても満足しております。

なかなかコロナワクチン接種の予約が取ることが出来ず、どうしたら良いのか分からず困っていたところ、“ワクチン接種の予約は出来ましたのでご安心ください”と有り難いご連絡も頂きました。

先生とお話しの中で、“薬を減らして飲んでいきますよ”と何げなく先生に話しました。何と其のあとに頂い薬は一粒を半分にし、密封した小分け袋で処方されました。母は薬を手にとって、恐縮し言葉にならないくらい感動しました。何より大事なのは、先生が患者にさり気ないお話しでも敏感に汲み上げ、素早く対応して下さる事です。こんなにお気遣い、些細な配慮に胸がいっぱいになりました。

**<大切な医療とは>** 母は医学者として、糖尿病や心臓病等内科の病気は、なってからの治療では遅いので、病気になる前に定期的な予防診療を受けて、身体の状態確認のための予防医学が大切な医療であることを注目して欲しいと主張しております。

日本は観光大国のみならず、長年にわたり育んだ医療体制は世界一であることと察しております。先進医療器材を具備し、日本医療現場の人道的な体制は、大きな潜在的エネルギーとしてこれからも伸ばして行って

欲しいと思います。医療関係者たちが、医徳が高く熟練した技術力、心のケアがすべての病気を治す一番の医療だと思っています。



<ピアノを弾く母親>

これから年齢を重ね老化して行くことを自然な変化ですから、坦然と受け入れなければなりません。異国の環境に融和し、余裕を持った生活、そしてお医者さんとの繋がりを大事にして、この先の人生を歩んで行ければと希望を抱いております。

今では、私が毎日日本で生活していて当たり前と思っていましたが、観光客として来日した親族は、“日本の接客態度は、幾らお金を払っても文句ないですね”と話をしていました。

母親の治療も全く同じ思いで、言葉通じなくても心では伝わった想いの感動は偉大です。



<日本と中国の架け橋のような虹>

**<今、思うこと>** 母親が日本での生活、医療などについて感じたことにふれてみました。日本と中国の関係は“一衣帯水”と言われていますが、お互いに国を知り、理解し合い交流を進めることが重要であることが国交正常化50周年を迎え改めて感じる昨今です。

つい最近、母親が治療を受けている病院前を通りましたら、虹が架かっていました。日本と中国の架け橋とも思えるようなきれいな七色の虹でした。

## 2023年度 中国語講座生(含む継続受講生)募集要項

横浜日本中国友好協会 2022.12

### I 新規講座生募集

初めて中国語を学習する受講生を対象に募集します。クラスは「基礎・入門」とし、金曜日(夜間) 土曜日(午前)に開講します。ただし、応募状況により金曜日又は土曜日のみの開講となります。

なお、学習歴のある新規応募者については、習熟度に応じたクラスに編入することが可能です。

### II 在籍講座生受講更新申込

2023年度のクラス編成、担当老師及び教材選定等のため、在籍講座生の受講更新申込をお願いします。現時点でのクラス編成は、金・土曜日各5クラス「基礎入門」「基礎初級」「口語入門」「口語A」「口語B」

### III 2023年度講座回数、開講日時

講座開講回数は年間40回、各月3回～4回 <金曜日> 18:30～20:30 <土曜日> 10:00～12:00

### IV 開催場所

主に「かながわ県民センター」(横浜駅西口徒歩5分)で実施します。

### V 受講料

前期・後期(各20回分)毎に一般35,000円・協会会員31,000円・高大学生25,000円・中学生10,000円  
受講料は、別途配布する振込票で所定の期日までに前期・後期の分割納付をお願いします。  
納付された受講料は、原則として返金しません。また、新規受講生の入学金はありません。

### VI 申込方法、問い合わせ

受講申込は:メール、電話で申し込んでください。

横浜日本中国友好協会 HP →

E-mail: info@yokohama-jcfa.jp TEL090-2913-1613まで



中国語講座 **<無料体験講座>** を開催します。

～初めての方、経験者も大歓迎です～

日時: 2023年3月19日(日) 10:00～11:30

場所: かながわ県民センター 301号 (横浜駅西口徒歩5分)

お問い合わせ・申込み: info@yokohama-jcfa.jp

### <事務局報告・経過と予定>

- 11月 1日(火) 移山133号(日中国交正常化50周年記念・特集号)発行、配布
- 11月 4日(金) 治水の神「禹王」と「徐福」伝来写真展・講演会 地球市民かながわプラザ
- 11月18日(金) 一般・中国語講座・太極拳講座会計監査(前期) 県民センター
- 11月21日(月) 敷田博昭(協会顧問)県議会議長就任報告会 新横浜プリンスホテル
- 12月 6日(火) 協会HPリニューアル移行 1月4日「協会通信N04」発行、配布
- 1月10日(火) 理事運営委員会及び新年会(予定) 1月22日(日) 中国春節

<編集後記> 3年余にわたるコロナ禍、日中間の人的交流が閉ざされている。一方、東アジアの情勢をめぐり“隣国中国の軍事的な対立や有事”を煽る言動は、我々が望む友好交流の妨げの一因にもなっている。兎に角、平常の生活に戻り日中間の人的交流が回復し、相互交流、相互理解が進むようになることを望む。SNSが広がる中で、紙面での交流や情報交換も必要と感じつつ、今年も情報紙を編集、発行して行きたいと思います。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。引き続き皆様からの投稿やご意見をお待ちしています。事務局・小松崎

「協会通信N04」2023年1月発行 横浜日本中国友好協会 〒223-0054 横浜市港北区17-5 飯田助知方  
TEL090-2913-1613 <http://www.yokohama-jcfa.jp/> 発行責任者: 飯田助知 編集責任者: 小松崎勇